

<2015年3月>

顔を見て、顔を診る

国保連合会嘱託 東田 文男

COLUMN

「君、いま何歳だい？ まだ長生きしたいかい」。13年前、51歳の時です。ある病院の医者からこんな言葉をいわれました。悪い病名が頭をよぎり、その時は医者言葉に怒る余裕すらありませんでした▼医は仁術なり。貝原益軒は著書『養生訓』で、医者には人を思いやり、慈しむ心をもたねばならないと「医者条件」をあげています。その一方で、患者も「よい医者を選ばないといけない」と指摘しています▼良医を選びたい。だれしも望むことですが、これが難しい。そんな時、注目したいのがいわゆる身近にいる女性陣のロコミ情報です▼その情報ネットワークは、地域はもとより他府県の病院まで張り



巡らされていることもあります。子育てや介護などの体験も通して集積された情報は、足と目と耳でかせいだ生きた情報といえます▼定年後、初めて人間ドックを受診しました。予想通り体のあちこちで赤信号が点滅し、「かかりつけ医」を持つ必要性に迫られました。その際、お世話になったのが家内を介してのロコミ情報でした。情報は医者腕前だけでなく人間性にまで及んでいました▼男は意外と怖がりです。ちょっとした病気でも不安でしょうがない。どんな気持ちで医者の前に座っているかを理解してもらいたいと思っているのではないのでしょうか。ですから、パソコンの画面ばかりを見て患者の顔を見ない医者は願い下げです。「顔を見て、顔を診る」。まずはそんなお医者さんであってほしいものです。